

セクシュアル・マイノリティの子どもを対象とした アメリカの公共図書館サービス

池田 真里江

セクシュアル・マイノリティは、アイデンティティを確立する青年期に、自分の性的指向や性自認が周囲と異なると、「自分とは何者なのか」を見失いやすくなる。これを防ぐためには、青年期のアイデンティティ確立を支える場が必要である。その場所として、多様な資料を通じて 1 人でじっくり考えることのできる環境が整備されている公共図書館が適している。そこで本研究では、セクシュアル・マイノリティの子どもと公共図書館に着目し、研究を進めた。

本研究では、セクシュアル・マイノリティの子どもが、自分の性について正しく理解し自己を確立するために、アメリカの公共図書館はどのようなサービスを行っているのかを明らかにすることを目的とした。研究方法は、文献調査、ウェブサイト調査を用いた。本研究は、アメリカ図書館協会とアメリカの公共図書館の LGBTQ の子ども向けサービス（2 歳から 19 歳）を研究対象とした。

本研究では、アメリカ図書館協作成が作成したレインボーブックリストの 2008 年版と 2019 年版に掲載された図書 161 冊、アメリカの公共図書館が作成した LGBTQ 資料リスト 306 点を対象に、独自のジャンルを付与しその傾向を分析した。また、アメリカ図書館協会 LGBTQ 関係組織、プライド月間や禁書週間の取り組み、LGBTQ の子どもを対象とした図書館サービスの現状などを調査した。

レインボーブックリストの分析について、2008 年版はゲイ、レズビアンが中心であるのに対し、2019 年版は低学年向けには LGBTQ 関連のテーマ、高学年向けには愛や友情など幅広いテーマが選択されていた。また LGBTQ 資料リスト作成館の地域を、アメリカ西部、中西部、北東部、南部で区別したとき、最も多いのは西部、最も少ないのは南部であった。

西部に位置するサンフランシスコ公共図書館、ロサンゼルス公共図書館、ピマ・カウンティ公共図書館は、LGBTQ 資料を置くためのフロアや専門委員会の設置、LGBTQ コレクションの構築、LGBTQ 関連のイベントの開催などを積極的に行っていた。特に、プライド月間や禁書週間には、LGBTQ に焦点が当てられ、より多くのイベントが開催されていた。一方、南部に位置するジャクソンビル公共図書館やアラバマ州の公共図書館では、LGBTQ イベントの中止を余儀なくされるという事態が起こっていた。

本研究の調査を通して、セクシュアル・マイノリティの子どもを対象としたアメリカの公共図書館サービスの多彩な取り組みが明らかになった。今後、子ども向け LGBTQ サービスの詳細や効果を明らかにするための図書館職員へのインタビュー調査をすることによって、さらに異なる実態が見えてくる可能性がある。

(指導教員 吉田右子)